

むかし、あるところに、ひとのよい男がいて、ぬけ作と呼ばれていました。ぬけ作は、おかみさんとふたりで暮らしていました。

ぬけ作は、毎日、おかみさんにお餅をひとつ作ってもらって、それを持って、山へ木を切りに行きました。とちゅうの道ばたに、石で作られた背の高い大きな人の像がありました。それは、石人といいました。石人は、いつも、ぬけ作がやって来るのを見ると大きな口を開けました。ぬけ作が、

「お腹が空いたのかい。お餅を食べたいのか」ときいても、石人は黙っています。

「さあ、えんりよして黙っていないで、少し食べてみな」

ぬけ作が、そういつて、お餅を半分に割って、石人の口におしこんでやると、口がもぐもぐ動いて、ぱくぱくとのみこみます。ぬけ作は、晴れの日も曇りの日も、石人のそばを通るたびに、いつもお餅を半分くれてやりました。

年越しも近づいたある日のことです。ぬけ作が、いつものように山へ行く道で、石人の口にお餅をおしこむと、石人が、いいました。

「ぬけ作よ、ぬけ作よ。おまえさん、家に帰ってふくろをひとつ持ってきなされ。そして、わしの腹の中に入って、銀をつかみだして持って帰るとよい」

ぬけ作は、大急ぎで走って帰ると、おかみさんに、

「おい、ふくろを出してくれ。銀を入れるから」といいました。おかみさんは、

「なんですって。うちに、ふくろなんてあるもんですか」といいました。そして、靴の布をはがしたのと、ズボンをぬいで、ぬけ作に渡しました。

ぬけ作は、石人の口の中に転がりこんで、靴の布とズボンに銀をつめこみました。それからまた石人の口から転がり出ると、町へ行き、魚や肉や米を買って帰りました。

さて、ぬけ作には、欲ばりの兄さん夫婦がいました。

年越しの日、兄さんが嫁さんにいいました。

「ぬけ作のやつ、腹をへらして困っているだろうなあ」

嫁さんは、

「あいつなんか、かまうことないよ。でも、あいつが腹をへらしているのを見るのは、おもしろいわねえ」といつて、ぬけ作のようすをのぞきに来ました。すると、ぬけ作と

おかみさんは、おいしそうなごちそうを食べているではありませんか。嫁さんはびっくりして、

「そんなごちそうを買うお金、いったいどこから手にいれたんだい」とききました。

「おれ、毎日、道ばたの石人にお餅を半分やつてるんだ。そしたらこのあいだ、石人が『わしの腹の中に入って銀をつかみだせ』っていったんだ」

「銀はまだあるの」

「うん、腹の中いっばいだ」

嫁さんは走って帰ると、兄さんにこのことを話しました。兄さんは、

「あいつにできることなら、おれにだってできないことがあるもんか」といって、その日から、毎日のように石人のところに行ってお餅を食べさせました。

つぎの年越しが近づいて来ました。石人は、兄さんに、ふくろを持ってきて、お腹の中の銀をつかみだすようにいいました。兄さんは、走って帰ると、かけ布団ふとんの綿わたを取り出して、ばかでかいふくろをこしらえて持って来ました。そして、石人のお腹の中に転がりこむと、銀をつめこみ始めました。

石人は、口を開けて待まっていました。いくら待っても、兄さんは出て来ません。とうとう待ちくたびれて、不意ふいに口を閉とじました。ちょうどそのとき、兄さんがお腹の中からもぐり出て来て、転がり出ようとなりました。そのとたん、石人の口に首をはさまれてしまいました。いくらもがいても、口をゆるめてくれません。とうとう、日が暮れてきました。

嫁さんは、家で待っていました。待ちくたびれて、

「きつと、銀をたくさんつめこみすぎて、ひとり運べなくて、あたしが助けに行くのを待っているのかもしれないわ」と考えました。

嫁さんが、にこにこしながら石人のところにかけてつけると、兄さんの首が石人の口にはさまれてうごけません。嫁さんは、兄さんの頭をつかんで力いっばい引っ張りました。それでもぬけません。そこで、近所の人たちを呼んできて、みんなで力を合わせて引っぱりました。ようやく、兄さんの体はぬけ出しましたが、首が、長く長くのびてしまいました。測はかって見たら、四メートル近くありました。ふくろの中には、銀のかけらさえ入っていませんでした。

ある夕方、ぬけ作が、山から帰ってきて、石人のそばを通ると、石人がいました。

「おまえさんの兄さんの首は、まだ治せるよ。十二人の花嫁が、ひとりずつ『ちぢまれ』と声をかけさえすればいい。首はちぢんで元のようになる」

ぬけ作は、走って帰って、兄さんの嫁さんにこのことを話しました。嫁さんは、周りの村々を駆けまわって、花嫁を十二人集めてきました。

最初のひとりが「ちぢまれ」というと、兄さんの首は一尺ちぢまりました。ふたり目が「ちぢまれ」というと、また一尺ちぢみました。そうやって、十一人目が「ちぢまれ」というと、もとの首より一尺ばかり長いくらいになりました。ところが、十二人目の花嫁は、とてもはずかしがって言葉が出ません。みんなにせかされて、やっと小さな声で「ちぢまれ」といいました。

「え、なんだって。よく聞こえなかったよ」と、みんながいったので、もう一度、小さな声で「ちぢまれ」といいました。

ふと見ると、兄さんは、頭の先まで体の中にちぢまりこんでいましたとき。

おしまい

村上郁再話

資料『中国の昔話』澤田瑞穂訳／三弥井書店